

大阪体育大 ライフセービング部

水辺の安全を守る

FOCUS

追いかける。大学生。

梅雨も空けると空には太陽が輝き、入道雲が顔を見せるなどすっかり夏模様。

大阪体育大学ライフセービング部は夏にプールや海水浴場で監視活動を行っている。今回は7月2日から始まった淡輪海水浴場(大阪府)での活動取材した。

大阪湾を一望し、淡路島までも見渡すことが出来る「ときめきビーチ」には青空の下で友人や家族とともにビーチバレーをしたり、ゴムボートを浮かべたりして多くの人がそれぞれの時間を楽しんでいる。海水浴場の監視活動を行っているのは大体大ライフセービング部の学生や卒業生ら8人だ。日焼けした身体の上から黄色のTシャツを着て、海で楽しむ人々を危険から守るために高い場所から監視し、「これから満潮になるので注意して下さい」などと声かけ活動を行った。

今年で創部15周年を迎える大体大ライフセービング部。始めは部員2、3人の同好会からのスタートだったものの、現在では40人以上が所属する団体になった。メインの活動である夏場の監視活動は関西圏だけではなく、沖縄や湘南でも行うという。それに加え、ライフセービングの資格講習や技術を高めるために行うビーチフラッグスといった競技大会に参加するなど、

人々の楽しい時間をセービング

年中通じて活動している。人々の安全を守る活動とあって、日々の練習は水泳だけでなく、陸上も積極的に取り入れるなどハードな構成だ。今年入部したばかりの奥野明歩さん(大体大・1年)は「最初は泳ぐのが苦手でもつも泣いていた」と話す。それでも練習を積み重ねた。そしてこの夏、先輩に付き添ってもらいながら監視活動デビューを果たした。

ライフセービングには体力や技術の他にコミュニケーション能力も求められる。監視や人命救助の場面では部員同士の息の疎通が重要になってくるし、声かけ活動においては人々にしっかり情報を伝える必要がある。「後悔しな



いように、気になったことはその場で声をかける」。大谷健将さん(大体大・2年)はそう心がけている。活動を通して、人々が楽しめる環境作りをする苦労が楽しさに変わっていったという。

活動は部の卒業生も参加している。卒業生でディレクターとして財政面や地元との調整役を務めている中村勇さんは「ライフセービングは自分を成長させる活動。お金にはかえられない。その思いはいつまでも強い」と語る。

今年の夏も水辺に多くの人々が集う。大体大ライフセービング部は人々の楽しい時間とその安全を守るために、汗を流し奔走する。

(聞き手 多田隼翔)

UNN 関西学生報道連盟

FOCUSは

神戸大学ニューズネット委員会
 同志社大学 PRESS 編集部
 NEWS 立命通信社
 関学新月通信社
 大阪大学 POST 編集部

関西大学タイムズ編集部
 神戸女学院大学 K.C.Press 編集部
 京都女子大学藤花通信編集部
 京都大学 EXPRESS 編集部

の共同編集による週刊フリーペーパーです